

# 佳作

飯村郁さん 法学部法律学科 4年

「ロールズ：正義の原理」 川本隆史著 講談社

これはジョン・ロールズという思想家の思想を紹介した本である。彼は正義論（正義とは何かをストレートに考える学問）という分野のビッグネームで、「公正としての正義」という考えを唱えた。正義というと実生活からかけ離れた、小難しい話ではないかと思ってしまうがそんなことはない。彼の正義論は端的に言えば格差について論じたものであり、今の日本について考える便利なツールになる。

現代の日本では生活保護等の社会保障により、最低限の生活をすることはできるのが当たり前のことになっている。しかし国が税金を集めて、そこから生活保護等を行うという仕組みは本当に正しいのか、よく考えてみるとわからなくなってくる。誰も自ら望んで税金を払っているわけではない。みんなの為にみんなでお金を出し合う仕組みが税金だと考えても、裕福な者は社会保障から利益を得ているわけではないので、なぜ貧しい者の生活の為に税金を払わなければいけないのか疑問が残る。税金を無理やり取っていく国は泥棒（あるいは盗んだ金を貧しい者に配る義賊）とどう違うのか。よく言われる説明はこうだ。「あなたは今は裕福かもしれないけど、何かあって生活にも困るほど貧しくなってしまうかもしれない。その時あなたが助けてもらえるように、今はあなたが貧しい人を助けなきゃいけないんですよ」。しかし「自分が困った時に助けてもらえなくても構わないから、そんな税金は払いたくない」と言われたらどうするのか。正直困ってしまう。反論できなければ社会保障は国による泥棒と変わらなくなってしまうが、反論するのはかなり難しそうに思えるからだ。

ロールズのいう「公正としての正義」はこのような考えに対して有効な反論になる。彼は恐らく、それは正義に反する為認められないと言うだろう。では彼のいう正義とはなにか。それはたまたま裕福な家に生まれたとか、黒人に生まれたとかの偶然の事情によって人が幸せになったり不幸になったりしないことである。そして自分が金持ちなのか貧乏なのか、白人なのか黒人、ヒスパニック、黄色人種等なのか、このような偶然の事情を知らない人々に話し合いで社会の仕組みについて決めさせれば、偶然によって不幸になることを避けようとして正義にかなう制度が選ばれるはずで、それは「機会の平等」と「恵まれない人の利益にならない所得格差の否定」であると彼は考えた。

今日本では格差を巡る問題が頻繁に報道され、学力と所得の相関関係・社会的地位の相続問題と併せて格差の拡大と固定化が大きな社会問題になっている。その中で我々は格差問題について考えないわけにはいかないだろう。ロールズという大思想家の考えは「なぜ格差がいけないのか」教えてくれる。それは格差について考えるのに必要な土台になるものだと私は考える。